



埼玉県舞踊協会
NO.38

埼玉県舞踊協会ニュース

Saitama Dance Association

発行所：埼玉県舞踊協会
発行者：中村 友美
埼玉県さいたま市浦和区東仲町 1-16 鳥昇ビル 3F
TEL:048-882-7530 FAX:048-882-7549

【新任の「挨拶」】

埼玉県舞踊協会会長 中村友美
猛暑、酷暑が去り、秋の候、皆様にはご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

役員改選の本年5月、投票選挙開票後、前会長の藤井利子先生が辞意を表明され、新役員会にて後任選挙となり選挙管理委員会立ち合いの元開票し、6月22日の平成26年度第48回総会に於いて承認され会長に就任致しました。

歴代の会長、諸先生方が半世紀に渡り築き上げられ、発展を続けられた埼玉県舞踊協会会長という重責を、未熟な私が務めることが出来るのか？不安多々ではあります。役員の方、協会の皆様のお力をお借りして前進し更に発展、活動する協会として、次代に引き継げるよう努力して参りたいと存じます。

平成26年度、初の大仕事、第47回埼玉全国舞踊コンクールは皆様のご協力により滞ることなく無事終了致しました。秋には埼玉協会ならではの「ステージ」公演、「ジュニアフェスタ」「コレオグラフィ」の目が開かれます。新しい試みや発見が期待され胸が躍ります。どうか埼玉県舞踊協会へのご支援を宜しくお願い申し上げます。

【理事をお引き上げする「お祭り」】

堀部明里
この度、理事に選出させて頂き驚いております。私なりに大好きなバレエに夢を抱き歩んでまいりました。大袈裟ではありませんが、多少でもバレエを通じて世の中のためになればと思っていた時に、このような機会に恵まれました。「堀部さんで大丈夫？」と思われる方もいらっしゃると思いますが、初心者マークの理事ですが、諸先輩方の御助言を頂きながら、精一杯務めを果たしてまいりたいと存じます。宜しくお願いいたします。

原島マヤ

この度、新理事になりました原島マヤです。子供の頃からお世話になってきた、埼玉県舞踊協会と私は同じ年です。新生埼玉県舞踊協会の発展のためお役に立てるよう、一日も早く仕事を覚え一生懸命頑張ります。そして、埼玉県舞踊協会と共に歩んで行きますので、どうぞ宜しくお願い致します。

【新役員構成】

名譽会長：津田郁子
名譽会長：藤井利子
顧問：小沢金四郎
新野代
山路陽美子

埼玉県舞踊協会役員
会長：中村友美
副会長：矢野美登里
上原尚美
相後：由井力ナコ
理事：アキオキムラ、上田仁美
笹原珂子、河上正子
窪内穂子、佐藤長寛
榑沢寿美、原島マヤ
藤井 香、堀部明里
松崎すみ子、山中育子
山本敦子、吉田久木子

監事：大岩静江、志保野ひろみ
【担当一覽】（★はチーフ）
協会運営責任者
総務
★中村友美、矢野美登里、上原尚美
庶務
★佐藤長寛、原島マヤ、山中育子
事務局員：新野久美子
経理
★河上正子、堀部明里、吉田久木子
広報
★山本敦子、笹原珂子、アキオキムラ、ラモナ、（監事）上田仁美

事業部
コレオグラフィの目ジュニアフェスタ
担当理事：★藤井香、上田仁美、原島マヤ
部員：市川華代、和泉由留、上川原雅子、嶋麻津絵、若野信子
バレエ・モダンダンス・エッセイバル
担当理事：★板倉美、上田仁美、吉田久木子
部員：岡本順子、小林和加枝、山中育子
ステージ
担当理事：★崎すみ子、アキオキムラ、山本敦子
部員：北原弘子、すずきさよこ

埼玉県全国舞踊コンクール
実行委員長：矢野美登里
副委員長：河上正子
担当理事：アキオキムラ、上原尚美
部員：窪内穂子、板倉寿美、原島マヤ、堀部明里
部員：佐々木祐子、志保野ひろみ
ダンスセッション
担当理事：★窪内穂子、上原尚美、笹原珂子、佐藤長寛、山本敦子、吉田久木子
部員：愛智伸江、白石久枝、谷丹梨絵

評 モダン：1部(成人)

舞踊評論家 うらわまこと
「自分をしっかりアピールした大前裕太郎」
コンクールの数が増え、どのコンクールも参加者が減少傾向にあるが、モダン部門、とくにこの成人の部は昨年より1割以上増加した。

決選進出は50名うち男子5名。決戦進出者全体として、とくに女性によく訓練されており、長いキャリアを感じさせる者が多い。それだけに、コンクール参加という、初々しい意気込みが感じられにくくなったような気がする。やむを得ないことなのだろうか。つまり、作品もよく考えられているものが多いし、それをうまくまとめているのだが、自分のことを見せたいという意識が少し弱いのだ。言い換えると通常の公演におけるものとの違いが見えない。しかし、これはコンクール、もつと自分のすべ、あるいは特徴を強くアピールしてもよいのではこれは私見、異論もある。

それだけに、個性の強い、ピカッと光るものを見せたダンサーが目をつけた。一位は、大前裕太郎。新進の若手。どちらかというと短距離だが、そのあふれ出るエネルギー、ジャンプ力やうまく利用して空間をかき乱し、自分をしっかり主張した。この個性は貴重だが、それを生かす作品に工夫が必要。しかし、創作部門では動きをきつと押さえて対照的な作品を踊ったという。そのクレバーさがこれからの道を開くだろう。2位の鈴木いつみ。基本はオーソドックスなのだが、繊細ながら柔軟性に富んだ動きは、現代性をも感じさせ、強く目を惹いた。続く藤井

加は、独特の土のにおいする素材で骨太の動きの上にフイーブが加わった魅力があり、コンクールらしい初々しさがあった。藤井美乃里はショーツで男子風。セリフ主体の音響、あえて人間味を押さえた動きもきわめて個性的。ただ、全体としてはやや単調。彼女の別の面も表現されてダンサーとしての魅力が増すと思う。つまり、作品が本人より前に出たのだ。加賀谷美は、独特の動きがよくコントロールされており、音楽と刺激し合せてダンサーとしての表現力の確かさを示した。単調な音楽のなかに動きの自由さを見せた田中朝子。無表情の表現が独特の知的な魅力につながった渡部悠。また、赤い帽子によって、好感度の高いドラマを演出した伊藤有美。成熟した雰囲気を出した佐々木泰絵が上位を占めた。さらに端正な動きの小室真由子、たおやかな表現の田中友美も印象的。

男性では大前以外や動きが固く単調になりがちだが、白髭真の表現に味があった。また、かつてのように頭からバレエを否定することなく、柔軟な指導を心がけている指導者の成果も着々と上がっているように感じる。将来アロになるか趣味として続けるかは本人次第だが、生徒の進路をできる限り狭めることのないよう、国内外の舞踊界の動向にも目を向けることを各スタジオの先生方に配慮していただきたい。

十代半ばといえは、心身ともに大きな変化の時。人生でもっとも多感な時期であり、自我の芽生えと他者との関係性に悩む頃でもある。さまざま葛藤は決してマイナスではなく、その人なりの表現に昇華され、素晴らしい舞台成果を挙げることができる。観客の美意識に直截に訴えたい振付は、観客の美意識に直截に訴える力を持つ。このため、ラインの美しさに寄りかかる作品も散見されたが、モダンダンスの持つ内面性を融合させることで、より高次の芸術が追求できると思われる。

ショーダンスの形式は、児童の運動能力を明確に見せる利点がある。ただし皆が一律同じように見える難があった。児童の個性や、本来の子供らしさの発揮という点を、もう少し考慮する必要があるのではないかと。また数は少ないが、男子児童の躍進も目立った。バレエ・テクニクを自分のものとし、男らしさ、力強さを見せる術を心得ている。一つの世界を形作る気概を全員が感じさせた。

評 モダン：2部(児童)

舞踊評論家 児玉初穂
今回、1-1組の児童を審査させて頂いた。振付は、伝統的なモダンダンス、ダンス・クラシックの技法を用いたもの、シヨ・ダンスの見せ方をうけたものなど、多岐にわたる。芸術性を見るのか、テクニクを見るのか難しいところだが、評価の基準としては、振付の咀嚼度、個性の発揮、テクニクの明晰さを主とし、集中力も重視した。

最も印象に残ったのは、モダンダンスの伝統を受け継いだ振付が、高い密度で踊られた場合である。振付家や児童の真剣な対話が踊りだした。様々な舞踊ジャンルが混在する中で、日本独自の舞踊スタイルを身に付けることは、ダンサーの出発点として、また文化の継承という点からも意義深い。

一方、バレエの身体、バレエの語彙を用いた振付は、観客の美意識に直截に訴える力を持つ。このため、ラインの美しさに寄りかかる作品も散見されたが、モダンダンスの持つ内面性を融合させることで、より高次の芸術が追求できると思われる。

最後に、子供らしさや、男の子、女の子といったあらゆる概念から外れた組があったことを付け加えたい。『ペトルリウカ』のピアノ版で踊られた女子4人組。いわゆる「ヘン」な振付だが、それを狙ったのではない。音楽から生み出された動きを、4人が無心に実行している。身体感覚そのものがそこにあり、新しい世界が出現した。創作物のみで行われるコンクールの醍醐味がそこにあった。

歌の名義有希(チャコット賞)だ。宗教的な響きに連動した躍動感に満ちた動きは、類型的と言えなくもないが、身体全体から溢れるエネルギー、ナルな表現に心揺さぶられた。筆者は通常プロフェッショナルな舞踊公演以外では、児童・生徒の個人名は記さないことにしているが、今回のこのタワを破ったことを斟酌、お許しただきたい。

この他に今回のジュニア部で印象に残ったのは、男性の台頭である。各部門で男女の区分を設定するコンクールは別として、どこでも出場者は女性が圧倒的に多く、少数派の男性が目立って有利といわれてきた。あちこちのコンクールの結果を見ると、その通りと言えなくもない。審査員の誰もが、男性舞踊手の不足を何とかせねば、という気持ちでいる限り、この傾向は続くだろう。が、今回の決選出場男性は、三人とも揃って舞踊家として必要な資質と個性を持ち、優等生タイプの多い女性とは、根本的に異なる存在価値を示していたのが頼もしい。

また、かつてのように頭からバレエを否定することなく、柔軟な指導を心がけている指導者の成果も着々と上がっているように感じる。将来アロになるか趣味として続けるかは本人次第だが、生徒の進路をできる限り狭めることのないよう、国内外の舞踊界の動向にも目を向けることを各スタジオの先生方に配慮していただきたい。

第47回 埼玉全国舞踊コンクール

2014年7月19日(土)~26日(土)
さいたま市文化センター 大ホール・小ホール

主催◎埼玉県舞踊協会
共催◎(財)さいたま市文化振興事業団
後援◎埼玉県/埼玉県議会/埼玉県教育委員会/埼玉県文化団体連合会
朝日新聞さいたま総局/埼玉新聞社/東京新聞さいたま支局
毎日新聞さいたま支局/読売新聞さいたま支局/テレビ埼玉/チャコット(株)
(社)現代舞踊協会/(公社)日本バレエ協会/(財)橋秋子記念財団

モダンバレエ

1部(成人)

大前裕太郎

埼玉コンクールは、作品創作に挑戦する原動力となる場所でした。今回、名誉ある賞を頂き、先人が通った長い道のりのスタート地点に立てた気がします。今後とも、真摯に取り組む進みます。ありがとうございました。

ジュニアの部

海藤優丞

このたびは、埼玉全国舞踊コンクールジュニア部門で1位を頂き大変嬉しく光栄に思います。これから、本間先生、山口先生にご指導頂きながら、もっともっと練習してまいります。

2部(児童)

塚本響

結果を知ったとき僕は、とても驚きました。表彰式まで実感はわかず、信じられずいました。本番では、ミスをしたところもありましたが、とても楽しく、全力で踊ることができました。今後も基礎を大切に頑張ります。

